学校だより　11月号

# 一中の桜並木

令和8年11月11日

「教　育　目　標」

考える人　思いやりのある人

助け合う人　成しとげる人

連雀学園三鷹市立第一中学校

校長　宮城　洋之

## 平和について考えるときに思うこと

副校長　岩瀬　久芳

２０１４年から3年間、派遣教員としてフランクフルトの日本人学校に勤務していました。フランクフルトでは3年間担任を務めましたが、3年目に中学2年生を担当することになり、初めて修学旅行を引率しました。

行先はベルリン、3泊4日の旅です。連邦議会議事堂やベルリンの壁、ブランデンブルグ門のような観光名所に加え、班別行動で博物館や動物園等も楽しみながらドイツの歴史や文化を学ぶことができる、生徒が中学校生活で最も楽しみにしている行事です。しかし、当然のことながら楽しむだけではありません。ドイツが歩んできた戦争の歴史を学び、生徒が自分なりに平和について考えることも、修学旅行の大きな目標の一つでした。

４日間の行程の中で、ベルリン近郊にあるザクセンハウゼン強制収容所やユダヤ博物館、ホロコースト記念碑など、戦争の、特にユダヤ人に対する迫害の記憶を残すいくつかの施設を訪れました。何百万の方が亡くなったと知ってはいましたが、その人たちにそれぞれの人生や物語があることまでは理解できていませんでした。非人道的な扱いを受けて命を落とした人々の苦しみや絶望に衝撃を受け、ただ黙々と一つ一つの展示を見て回ったことを覚えています。

修学旅行ではいくつもの見学地を巡りましたが、最も印象に残っているのはバイエルン広場です。

ここは昔、ユダヤ人の富裕層が多く暮らしていた街だそうで、見たところは何ということもない住宅街なのですが、あちらこちらに８０種類の看板がかかっています。表にはシンプルなイラスト、裏には第二次世界大戦中のユダヤ人の行動を制限するために定められた条例や法律が書かれていました。

例えば、水着のイラストの裏には「ユダヤ人はベルリン市内の公衆浴場やプールに入ることはならない　1938年12月3日」、パンのイラストの裏には「ユダヤ人が食料品を購入してよいのは午後4時から5時の間のみ 1940 年7月4日」など、日を追うごとに次々とユダヤ人の権利が奪われていったことがわかります。

ただユダヤ人だからというだけで、当たり前にできていたことがある日突然禁止され、常に誰かの目におびえながら生活しなくてはならなくなる。それを破れば強制収容所に送られ、過酷な労働の末に処刑されるかもしれない。のどかな街に溶け込む理不尽な看板から、私は差別というものの本質的な恐ろしさを見せつけられたような気がしました。

平和について考えるとき、私は差別をなくすことが何より大切だと感じます。差別の恐ろしさは「慣れ」です。はじめは違和感を覚えても、長く続けば日常になってしまいます。誰かが差別される状況に周りの人が慣れてしまったら、もう止めることはできないのです。

皆さんには、歴史を過去の出来事として学ぶだけでなく、そこから何を受け取り、これからどう生きるのかを考えてほしいと思います。差別や偏見に気付いたとき、自分はどんな言葉をかけるのか、どんな行動をとるのか。その答えに正解はありません。しかし、その問いをもち続けることが、平和な社会を築く第一歩になるのではないでしょうか。

11月は三鷹市の平和月間です。本校でも11月18日に平和の語り部の方をお招きし、戦争体験に関する講話を聴く機会を予定しています。戦争や平和について学ぶことは、過去を知るだけではなく、今を生きる私たち自身の生き方を見つめ直すことでもあります。講話を通して、平和な社会を実現するために自分には何ができるのか、一人一人が考える機会としてほしいと思います。